

東京大学大学院人文社会研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

最終報告提出日

2010年10月17日

派遣生の基本情報

木村拓、韓国朝鮮文化研究専攻、個人派遣

研究テーマ

朝鮮後期の外交関係謄録の収集と分析

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

韓国、ソウル、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院

(2) 派遣期間

2010年7月30日出発、同年9月27日帰国、総日数60日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

朝鮮後期（17世紀～19世紀）の外交関係史研究において、従来よく用いられてきた史料としては、『朝鮮王朝実録』といった年代記史料、あるいは『同文彙考』（中国関係）、『通文館志』（中国・日本関係）、『増正交隣志』（日本関係）、『辺例集要』（日本関係）などの編纂史料を挙げる事ができる。しかし、これらの史料は後代の編纂史料であり、より一次史料に近い史料として官庁の謄録（主として官庁が扱った公文書の謄写記録）を挙げる事ができる。外交関係の謄録は、すべて朝鮮後期のものであるが、かなりの数量がソウル大学校奎章閣韓国学研究院に伝存している。今回の調査の目的は、朝鮮後期の外交関係謄

録を出来る限り収集・分析することを通じて、朝鮮後期の外交関係を考察するための研究基盤を整えることである。

(2) 実際に達成された成果

1. 外交関係膳録・儀軌のあり方の把握

①中国関係

膳録：礼曹の属司である宴享司・典客司・稽制司がそれぞれ作成した膳録が存在。内容は中国使節の接待に関するもの。

迎接都監儀軌：迎接都監（中国使節の接待を行うために設置された臨時機関）の業務執行報告書。迎接都監は基本的に都庁・応弁色・軍色・盤膳色・宴享色・米麴色の六種の機関で構成され、儀軌も各々の機関ごとに六種類作成された。

②日本関係

膳録：主として特定の事案ごとに作成され、全部で30余種に及ぶ。ほとんどが礼曹の典客司の膳録である。

2. 外交関係儀軌・膳録から見てきたこと

朝鮮王朝の外交業務は、外交担当官庁の礼曹の属司である典客司・稽制司・宴享司が分担して行っていた。対中国外交においては、宴享司・典客司・稽制司が各々の担当業務を遂行しながら、臨時機関である迎接都監も別途に設置された。一方、礼曹の属司のなかで対日本外交業務に携わったのは、典客司のみであったとみられる。その理由は、対日本外交の実際の業務は慶尚道の東萊府で行われたからであったと考えられる。

(3) 今後の研究展望

展望される課題：朝鮮王朝の外交システムの解明

①朝鮮王朝の外交業務の遂行過程

今回の調査を通じて、朝鮮王朝の対中国・日本外交業務に携わった具体的な官庁を知り得たが、残された課題として、常設官庁である礼曹の属司（典客司・稽制司・宴享司）と臨時に設置される迎接都監との役割分担の問題（対中国外交）、礼曹の典客司と東萊府の連携のあり方の問題（対日本外交）を指摘することができる。

②朝鮮王朝の外交政策の決定過程

外交政策の決定過程に深く関与していた機関として、備辺司の存在が挙げられる。備辺司は16世紀以降、軍国機務のことを合議するために設置された機関であったが、外交政策

の決定にも深く関与した。備辺司には礼曹の長官である礼曹判書も加わるようになっており、朝鮮王朝の外交政策の決定過程を知るためには、外交懸案の処理をめぐって備辺司と礼曹がどのような形で連携したのかという問題が重要であると考えられる。

以上の二点を解明することは、朝鮮王朝の外交システムの解明において必須であると考えられる。